2017 第3回 これからの建築士賞

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。
なかでも最近は他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

募集要項

賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。
未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

名称及び受賞数

これからの建築士賞　10 点程度（但し、応募点数による）

応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが東京にあること。過去の応募者の再応募は可とします。
審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

審査員

遠藤 幹子（office mikiko / 一般社団法人マザー・アーキテクチュア）
岡部 明子（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授）
藤原 徹平（フジワラテッペイアーキテクツラボ/NPO 法人ドリフターズインターナショナル/横浜国立大学大学院Y-GSA 准教授）
山崎　亮（studio-L/東北芸術工科大学教授、同大学芸術学部コミュニティデザイン学科学科長/ 慶應義塾大学特別招聘教授）

審査結果

入賞8点（応募点数25点）

1	業績名	建築士は地域のかかりつけのお医者さんへ
	候補者名	株式会社さくら事務所
2	業績名	志摩ドクタープロジェクト
	候補者名	ナノメートルアーキテクチャー／野中 あつみ ＋ 三谷 裕樹
3	業績名	「未来につなげる社会貢献」 ―街に公共建築が根づくまでの長い道のり
	候補者名	新井　久敏
4	業績名	水辺の豊かで創造的な未来を作る活動における水辺の建築家の活動
	候補者名	岩本　唯史
5	業績名	空きテナントを活用して、商店街の衰退を食い止めつつ、地域の魅力発信と実験の場をつくる。
	候補者名	NPO法人AKITEN
6	業績名	パンは建築。神田川ベーカリー
	候補者名	株式会社神田川ベーカリー 軍司 有佳里、中島 千尋、三浦 雅美、小沢 彩、倉益 孝行、小牟田 恵、三浦 美樹、伊藤 大貴、嶋田 玲子、福本 怜、嶋田洋平、三浦 丈典、茨田 禎之、小田 大輔、多田 治樹、西村 浩
7	業績名	住居と園庭
	候補者名	松浦　荘太
8	業績名	実験研究室のリノベーション
	候補者名	建築築事務所 archichi office

関連情報：話題の書籍

これからの建築士 ―職能を拡げる 17 の取り組み

建築への信頼が問われる今、変わるべきは 100 万人の＜建築士＞の職能だ！

第 1 回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士―職能を拡げる 17 の取り組み』（編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉　協力：東京建築士会）が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売
本体価格 2,300 円＋税
発行：学芸出版社
http://www.gakugei-pub.jp/

第3回 これからの建築士賞

今回は25の応募があり、一次審査で全ての提案について一つずつ審査し、一人以上の審査員が推す13の提案を二次審査の対象とした。二次審査で残った13の提案について、更に個々に議論を深め、最終的に8つの取り組みを、審査員全員一致でこれからの建築士賞に決定した。

審査員講評

遠藤 幹子（Mikiko Endo）

建築家である皆さんが子どもの頃、なりたかった職業というのは果たして一つだったでしょうか？ それは年齢や環境とともに変化し、たまたま今は建築家と名乗っているだけ、という方も多いのではないでしょうか？

私自身は、社会人になった同時期にたまたま出産をしたため、「建築家と母親」という二つの仕事が柱となって、この十数年を歩んできました。私にとって建築というのは、世の中の困難や問題、人生の苦悩や悲しみを鮮やかに解決し、社会に秩序と調和をもたらすFormulaで、魔法のような力です。この力をもって、母親だからこその目線で社会に向き合ったことが、途上国の妊産婦死亡という深刻な課題を建築的に解決する成果につながり、本賞第1回の受賞に至ったのだと思います。これは十数年間、二足のわらじを履いていたからこそ育めた、私にしかできない建築の力だと信じています。

私たちの寿命はさらに延びるでしょうから、今後は恐らく、二足、三足のわらじを履き替えながら、大人になっても新しいことにどんどん挑戦し、その能力を発達させ続けることが求められる時代になるでしょう。そういう意味で、今回受賞された「神田川ベーカリー」と「建築築事務所」は、二足目、三足目のわらじを履き足しながら、軽やかに自然体に、それでいて強い使命感と責任意識をもってお仕事をされている頼もしい方々だと思います。

神田川ベーカリーは、建築士である女性の働き方について、建築事務所内での役割分担の枠から抜け出して、パン屋さんという事業を作り出すということで新しいFormulaを生み出していることが大変評価できます。先日伺った時はあいにく定休日でパンを頂くことができませんでしたが、古いアパートや味わいのある公園に囲まれた、とても素敵な界隈でした。この「パン屋さんである建築士さんたち」が、今後この地域にどのような関わりと広がりを構築して行くのか、とても楽しみです。

建築築事務所は、メンバーが建築士になる前に化学研究に携わっていたというキャリアの持ち主とのこと。「二足目のわらじ」だからこそできることを自ら積極的に見極めて、それを複数の案件で着実に実施されてきたことは大変評価できます。化学実験の現場は残念ながら素人の私には分かりませんが、このようなセカンドキャリアとしての建築士が、今後社会にどのようなイノベーションをもたらしてくれるか、とても楽しみです。

このように、二足三足のわらじを履くことで世の中に新たな価値を提供するのは素晴らしいことですが、それ自体が目的になって満足してはいけません。「かけ合わせたからこそ、どんな奇跡を起こせたか？」「どんなユニークさを発揮したいのか？」をいつも自覚し、「社会をより良く築こう」という使命感や責任感をいつも忘れずにいたいものです。その意味で、建築士という国家資格が我々の職能を証明してくれていることは、とても大きな支えになっています。

今回、建築のバックグラウンドを持って素晴らしい活動をされている何人かの方を推薦したかったのですが、残念ながら皆さん資格保有者でなく、非常に残念でした。この賞を通じて皆さんと議論を重ねながら、建築士という資格制度のこれからのあり方についても、何か新しい流れを作って行けたらいいなと思います。

岡部 明子（Akiko Okabe）

何をするにもまず敷地が要る――そう思い込んでいるが本当だろうか。人は、敷地という概念を持つ以前の、はるか昔から、身を置く空間を自ら設えてきた、すなわち建築してきたはずだ。それが敷地に縛られることで随分窮屈になった。私は最近、もっぱらスラム通いをしているが、敷地のはっきりしていないところでは、建築はもっと自由でたくましい。

水辺は、東京を含むアジアモンスーン気候帯では、汚れたものをすぐに水に流すことができ人が最も容易に住み着ける場所だった。他方、今年の審査では、ミズベリングの名で知られる「水辺の活動」が、これからの建築士のフロンティアであることに、みんなが納得した。少し皮肉な話である。港湾は国の管轄だし、河川を一部含む敷地設定はありえず、現行制度の下では管理関係が複雑だ。豊かな水辺空間を創出するのに、ゲリラ的活動から始めて、関係する多様な主体間を調整し、官民連携にまで拡げてきた戦略はうまい。

都市東京の土地利用の主流は、土地が細分化された戸建て住宅地である。空き家や空き地が増える傾向にあるなか、こうしてできた空隙が隣接する庭などと連担してシェアできればもっと住環境はよくなると誰でも思っている。だが、実現を阻んでいるのが、排他的な所有権を規定する敷地境界線である。「住居と園庭」では、それを見事にやってのけていることに感銘を受けた。設計した住居の1階ピロティ部分と庭が、隣接敷地に建つ保育園の園庭として提供されている。保育園との敷地境界線を成す塀の一部を撤去し、往来可能にしている。保育所の需要は高まっているのに一般に迷惑施設で、新設できる場所を探すのに難儀しているが、この住居に住む一人暮らしの高齢の女性は、保育園とつながることでかえって生き生きと暮らせるようになったという。

本来、人が身を置き活動する空間に絶対的な境界線は存在しない。今年の審査は、制度の枠内で建築しているうちに忘れてしまった当たり前のことに気づかせてくれた。

藤原 徹平（Teppei Fujiwara）

今年初めて本賞の審査に参加した。私が建築を大学で学び始めたのは1994年だが、本当の意味で建築をやっていこうと心を決めたのは、1995年の阪神・淡路大震災の復興ボランティアに参加した経験からだ。都市・建築がまとう歴史や記憶、この当たり前の存在によって我々の生活がいかに豊かなものになっているのか都市が失われて痛感した。また同時に新しい建築が社会や人間の関係を素晴らしく変えていくような奇跡的な瞬間も目にした。以降私にとっては新しく建築を設計することと、当たり前に存在している豊かな社会環境を維持するという一見矛盾した二つの行動が等しく価値を持つ。

株式会社さくら事務所は、ホームインスペクション（住宅診断）の草分け手的なプレイヤーであり、本賞が期待する建築士の未来的な役割をすでに長年実践してきている。良質な設計思想に基づく住宅が、スクラップ＆ビルドではなく再活用されていく社会を実現するためには、買い手と売り手がフェアにコミュニケーションできる客観的な指標、倫理的な規範が不可欠である。

ナノメートルアーキテクチャーの「志摩ドクタープロジェクト」は医師不足と赤字経営で崩壊寸前の地域医療を、医師と建築士による強固な協働作業で復活させようという試みだ。プロジェクトそのものは始まったばかりだが、実は建築士たちの地域に入り込んだ活動は学生時代にまで遡る時間の厚みをもったものだ。地域貢献が大学建築教育に取り入れられたことが、こんな形で実を結んでいくとはと良い意味で驚く。地域医療という広域かつ深層の社会システムを、個人と個人の結びつきによるプロジェクトによって補っていくとは！なんとすごい人間力＆チャレンジ精神なのだろうかという想いと、補わねば失われるという日本の地域社会の窮状への緊迫感とが同時に押し

迫ってくる。

本賞の審査に参加すると、受賞する活動だけでなく、賞を与えられなかった活動もその問題提起や社会背景は、十分に価値のあるものであることがわかる。「これから」を考える過程そのものが非常に創造的であった。賞をあげるという一方通行でない、賞選定の議論の過程のような、開かれた価値伝達の場を持つことも今後考えるべきであることは間違いない。

山崎 亮（Ryo Yamazaki）

「これからの建築士」の「これから」とは何を指すのだろう。そんなことを考えながら応募案を拝見した。その結果、「これから」は以下の5つに大別されるように感じた。

1つ目は「新たな分野で設計する」。実験室の空間を設計する、アート作品を構造的な視点から設計する、公共建築における設計者の決め方を設計するなど、これまで建築士があまり関わってこなかった分野で設計に携わっている事例である。2つ目は「ある分野に特化して設計を続ける」。銭湯や学校など、特定の分野にこだわって設計を続けるからこそ生まれてくる発想に「これから」を感じた。3つ目は「まちづくりに貢献する」。水辺空間や複数の空き店舗の活用を通じて、単体の建築物よりも広い範囲でまちづくりに関わる事例である。4つ目は「建築以外の事業に取り組む」。建築士たちがパン屋を始めるという事業は象徴的である。5つ目は「市民と建築をつなぐ」。ホームインスペクターやすまいのナビゲーターの育成や相談窓口の設置など、市民が建築に接する機会を増やす試みだといえよう。

特に印象的だったのは、公共建築における設計者の決め方を設計し直した新井氏の取り組みだ。公共建築を魅力的なものとするために、自らが設計しようとするのではなく、設計者の選び方を設計するという立場に徹した点が秀逸である。こうした立場で活躍する建築士が増えない限り、実力のある建築士が公共建築の設計に携わることができないという不思議な状況が続いてしまうことだろう。

また、商店街の空き店舗を活用して「これからの商店街」のあり方を模索する「NPO法人AKITEN」の取り組みも興味深い。通常だと借りるのが難しい空き店舗を、まちづくり会社や商店街関係者と協力しながら効果的な用途へと変化させている点がすばらしい。さらに、その用途が次の商店街のあり方を示すことになっている点も見逃せない。建築士による地域への貢献方法を示す好例だといえよう。

第3回 これからの建築士賞 入賞作品

建築士は地域のかかりつけのお医者さんへ

株式会社さくら事務所
安彦 直幸

建築・不動産にあるフロンティア 次世代に求められる建築士の役割

さくら事務所では「社会から必要とされていること」を常に模索し続けてきました。
その時に社会が抱えている課題や多くの人が困っていることに着目し、
それらを解決するためには何をどうしたら良いのか、どのようにお手伝いができるのか
を真剣に考え「あたらしい役割」として社会に提案し続けてきました。

建築士は公→私役割が変わる

100万人いる建築士より30万人しかいない医師の方が私たちの生活には圧倒的に身近な存在です。建築士がいかに現代社会のに“直接的に”関われていないか、ということが分かります。
さくら事務所では建築士が従来の設計・工事監理という枠を超えて一歩脱皮（アップデート）し、知識や経験を活かしながら、社会の課題に“直接的”に関われる役割を仕組みとして構築しました。

建築士をあきらめない働き方4.0

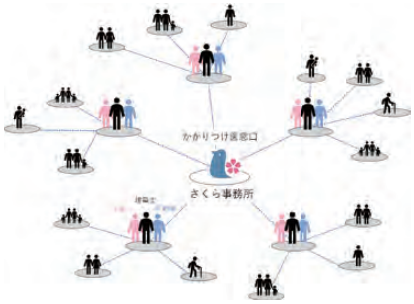
さくら事務所では、育児介護や本業（設計事務所など）とのバランスを図りながら自分のペースで自分らしい働き方ができるパートナー雇用制度を導入しました。性別や年齢、どのようなライフスタイル・サイクルであっても働き続けていける「建築士の働き方4.0」のプラットフォームの構築に取り組んでいます。

つくる人から守る人へ

今ある資産をどう残しどう長く活用するか、価値観や文化の成熟にともない、専門家である建築士の存在感が増す時代です。
さくら事務所は社会資産を「守る」建築士を、地域のかかりつけ医のような存在として社会に送り出すことで、空き家問題やユーザーの抱える課題の解決に貢献したいと考えました。

つながる ひろがる かかりつけのお医者さんネットワーク

従来の仕事（設計・工事監理）からアップデートした建築士が、広く社会に増えていくことにより、そのアップデートされた考え方や行動が、まわりの人々にも影響を及ぼしアップデートされていく・・・そして社会まるごとアップデートされていく・・・
そんな活動を行っています。こうした「かかりつけ医」の窓口であるさくら事務所は、ユーザーからの建物以外に関するご相談も総合的に対応し問題解決に努めています。



不安を取り除くホームインスペクション

住宅に精通したホームインスペクター（住宅診断士）が、第三者的な立場から、また専門家の見地から、住宅の劣化状況や欠陥の有無などを見きわめアドバイスを行う専門業務です。
さくら事務所では、2002年に「ホームインスペクション」を事業として開始し、現在に至るまで37,000件以上の診断に携わってきました。

建築士は社会資産の道しるべ

建築士が「公→私」に役割を変え、「つくる」から「守る」へシフトします。つくることで蓄えてきた建築士の専門知識は今、地域のかかりつけ医として建物を守るために活かされています。
かかりつけ医ネットワークを拡げることで、ストック時代に求められる社会資産の道しるべとなる事を目指しています。

コミュニティを支えるマンション管理・運営

近い将来、マンションのスラム化問題が顕在化する危険性が高まっています。さくら事務所では、ホームインスペクションで蓄積してきたノウハウを分譲マンションの管理・運営面に活用しています。コミュニティの集合体である分譲マンションの管理組合と、管理会社や設計・施工会社との橋渡しという役割を担っています。

啓発活動 知の集積

ホームインスペクションの実践のみならず普及活動に取り組み、出版やメディア出演などを通じた情報発信にも取組んでいます。
また、徹底した研修制度や月1回のカンファレンスなど、建築士が調査にデビューしてからも本部のバックアップが継続します。
カンファレンスは現場における課題やその解決策に関する討論の場でもあります。

私たちの理念は

人と不動産のより幸せな関係を追求し豊かで美しい社会を次世代に手渡すこと

不動産の達人 株式会社さくら事務所

① 建築士は地域のかかりつけのお医者さんへ

第3回 これからの建築士賞 入賞作品

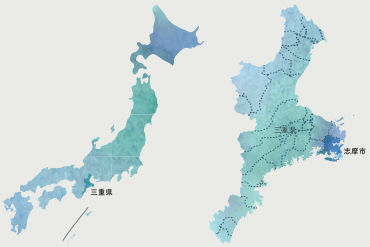
志摩ドクタープロジェクト

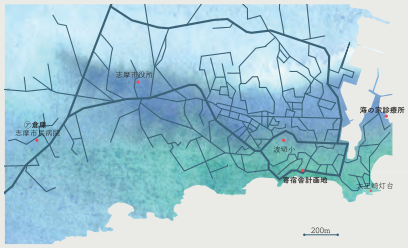
ナノメートルアーキテクチャー / 野中あつみ + 三谷裕樹

「医療で世界平和を」
これはある一人の医者の想いから始まったプロジェクトである。医療が人、まち、世界にできることのみならず、私たち設計者や建築も共に平和を考察して実践する。三重県志摩市の全域にちりばめられた魅力の断片から今はまだ可能性を模索中であるが、今回の展示ではこれまでの活動レポート、そしてこれから私たちが行うプロジェクト案を提示する。

始まりは研修施設を考えるきっかけを頂いたことだった。志摩には医療系学生の研修用宿舎はなく、病院から離れたホテルに泊まるしかなかった。この研修施設には、宿舎機能に加え、先輩職員達との交流（出張診療所や、医師によるレクチャー、歓迎会など）や、さらにはまちを楽しみ地元の人たちのことを少しでも身近に感じ、分かり合える場所が求められた。なぜなら、せっかく研修に来てもその地の魅力に気づかなければ、就職では東京や大阪など都市へ行ってしまう。このような場所は地域の医療、そしてまち自体のことを考えることに繋がるのではないだろうか。建築で地方の医者不足問題に少しでも貢献できないかと考えている。

私達は建築や空間から、まちや医療そして平和のためにできることを考えたい。小さなプロジェクトを起こし続けることでまずはまちの魅力を高めていくこと。それが私たちのだができる第一歩である。高齢化が進み、同様の課題は世界でも起こりうる。じっくりと時間をかけて向かい合い、世界最先端のモデルとなることを目指している。





㋐倉庫

志摩市民病院にある小さな倉庫をリノベーションした、院長との会話が目的のカフェである。病院職員と話す時間が取れなくなったことを懸念した院長が、出勤前後の時間ここに在室し、職員が自由に訪れて会話をする場所である。今後は医療についての議論の場や、学生へのセミナーなど、働く人のためのワークショップを企画したいと考えている。解体施工も素人が行い、椅子は職員の手で追加制作できるよう設計した。またこの利用者にも施設の背景を共有してもらえるようプロジェクトをまとめた冊子を作成した。

医学生インターン 寄宿舎プロジェクト

医学生を主とした寄宿舎である。医師、医学生の交流を促し、観光客の休憩所や、時には診療所や公民館としての公的な場所として地域住民との関わりがうまれる医療拠点となる。「石工の町」ならではの町中でよく見られる擁壁が連続するようなデザインを検討中だ。全室から志摩特有のリアス式海岸を見られるよう階段状の床レベルにし、海を切り取る大きな窓を用意する。過疎地域における地域医療について考察を行いモデルケースを提示する試みである。

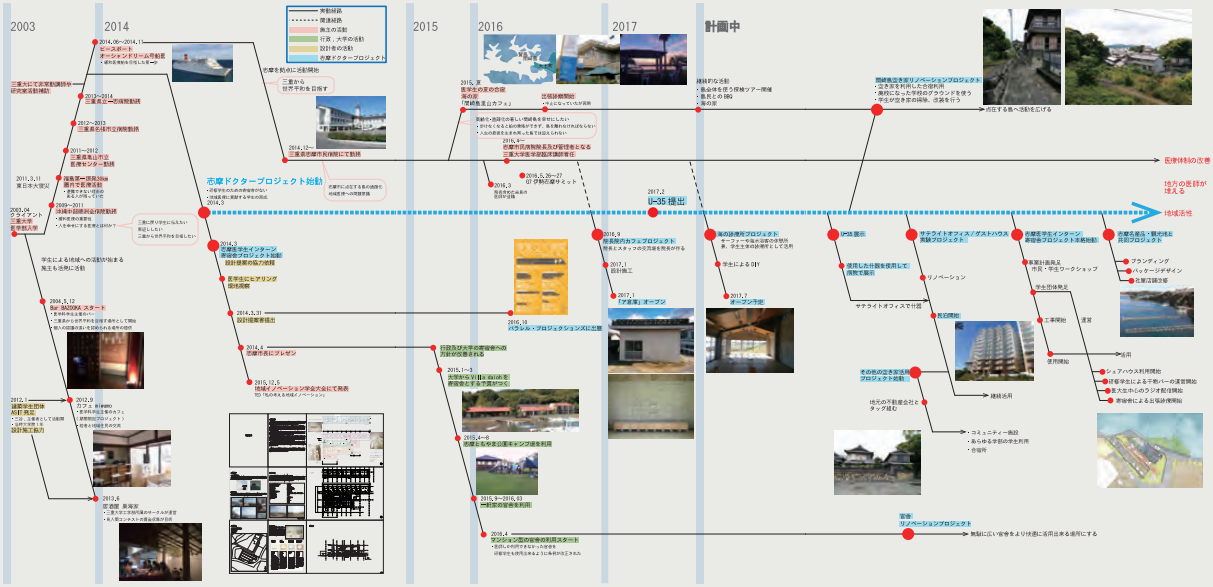
今後の活動計画

海の家 + 診療所
サーファーや海水浴客が多い海岸に学生が開設する。簡易なユニットを自主制作してもらう予定。

サテライトオフィス
リゾートマンションが破格で購入できる。東京と志摩は海外に行くよりも遠い。活動拠点、宿泊施設、賃部屋など何でもできる場所を目指す。

島の空き家活用
志摩にはたくさんの過疎化が進む島がある。贅沢な自然環境の中にある空き家を改修し、合宿所や観光客の寄り合い所にしていきたい。

観光物産の共同開発や改善
恵まれた資源を活かして手助けできることを模索中。



② 志摩ドクタープロジェクト

第3回 これからの建築士賞 入賞作品

「未来につなげる社会貢献」 ―街に公共建築が根づくまでの長い道のり

新井久敏

■上州富岡駅舎（富岡市 竣工 2011）設計：武井誠＋鵜島千恵 TNA ©Fumito Suzuki / Forward Stroke inc.

1

“公共建築” が面白味を欠いている。
自治体は“公共”の担い手ではなくなっていない。
以前は公共サービスの充実との名目で、地方にも公共施設を早く大量にと日本全国に同じような公共建築がつくられてきた。特に学校や公営住宅は標準的な設計で、どこかで大量に建設されてきた。

それらの群が一定の量確保されて以降は、少子化、過疎化による市町村合併に老朽化も絡んで、建て替えのブームが続いている。地方の時代といわれる中、地域を見つめ直すチャンスでもあったはずだが、財政規模の縮小とかつての標準的な建築への安心感もあってか、自治体では相も変わらず地域性に乏しい“公共建築”が発注され建設されている。

発注者である自治体がこのような状況なのだから、設計の受注者たる設計事務所も頑張りようがない。設計事務所は本来そのエネルギーを創造性へ十二分に発揮するべきなのに、コスト至上主義で出来るだけ建設コストを下げるようにと指示され、それに終始する有様である。

さらに設計者の選定のほとんどは入札によるもので「あなたが一番安かったので契約します。」と言われたところで、おいそれとやる気が起こるはずもない。しかし案や設計思想をもって設計者を選び出すプロポーザル方式は、入札に比べ格段に手間が掛かるために自治体は敬遠しがちである。そして、実施したところで実績主義の配点によって選出されるので、その結果は推して知るべしである。

そのようなこれまでの極限の経験から“公共建築”を成立させる為には大きく３つの問題点があると考えた。

1. 発注者・自治体の関心の低さ。
2. 利用者・市民の関心の低さ。
3. 受注者・設計事務所のモチベーション低下。

県の建築担当の職員として机走していた私は“より良い設計者を選ぶためにはどの様にすればよいか？”“実力を見定めたうえでやる気を出して取り組んでもらう方法とは？”と言う問いに対して模索し続け、発注者である自治体職員や市民の意識を変えるなどそう簡単にはいかないと考え、まずは３番目の設計者の選定にメスを入れることから始めた。

2

下記のとおり、従来の設計者選定手法（入札・プロポーザル・コンペティション）ではうまくいかないであろうことはわかっていた。

■従来の三つの選定方式の問題点
入札　→金額の多寡で設計者を選ぶ。
プロポーザル　→具体案を記載してはいけないため、その人や事務所の実力はうかがい知れるが、個々のプロジェクトに対する回答案はわかりにくい。
コンペティション　→設計案にとらわれすぎるため、発注者側の要求事項を事細かに決めておく必要がある。そもそもそうした企画・構想力がある発注者が地方には少ないこともあって実施は困難。

私は新たな手法を発明しなくてはならなかった。何回も試行を重ね続け、プロポーザルとコンペティションの中間的な方法が編み出されていった。こうすることで、具体案で設計者の実力を見定め、さらにその案に縛られることなく設計者・発注者・市民とが協働できる含みを持たせることで建築の発展性を持たせることが担保できた。この仕組みは設計を受注した設計事務所のモチベーションを維持し、さらには設計者の公募への関心度を高めることができた。
しかし、１番目２番目の自治体・市民の意識改革という根の深い課題が残されていた。

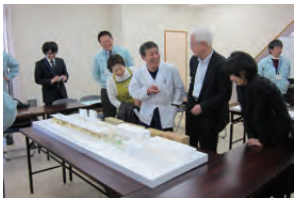
3

その大きな課題を解く鍵は、「専門家」であった。
通常、自治体においての建築計画は、企画構想→計画→予算化といったステップを踏んでいく。行政において、予算化された後での計画の見直し（調整であろうと）は難しい。だからこそ、最初のステップである“計画策定時”に「建築の専門家」を送り込むことにした。この時「建築の専門家」とは、その分野に造詣の深い建築の専門家でプロジェクト毎に選出していった。様々な条件の折り合いをつける計画策定時にこそ、建てられる“公共建築”への関心を高める最大のチャンスと捉えた。ただ、そのすべてに建築専門家を入れることは難しく、実際に計画から建築専門家が参画した事例は少数にとどまっている。

この計画策定時での専門家の発言はきわめて重要であった。
なぜならこの場に集まっている自治体幹部や、事業課の専門職員等は建築に関しては素人に近かったからである。ここで初めて建築の役割を（事例を通して）知らされ、みんなが「ほぉーっ！そうなのか。」と驚き、納得することがとても多かった。また市民ワークショップなどでもこうした専門家の発言は市民意識を高めるのに大変有効であった。
加えて、設計者選定からの関与であっても、審査委員会での専門家の発言が、自治体職員に与える“気づき”の効果は無視できないものである。

このように専門家の役割は殊の外重要であり、当然のことながら次のステップである設計者選定おいては、さらに無くてはならない存在である。

■万座公衆トイレ（嬬恋村 1999 年）設計：唐澤建築計画研究室
初めて計画策定時に専門家として中川武氏を招聘し、自然環境と建築というテーマに取り組んだ



■上州富岡駅舎　駅まち会議の様子
異なる自治体の発注者・設計者・専門家・市民らが同じテーブルでフラットに意見を交わし合い調整をする

4

「その分野の専門家」「その分野に造詣の深い建築の専門家」の、特に審査員としての役割は、「目利きの審査員」としてであり、単に当選案を選ぶだけの審査員であってはならない。このため発注者や市民への影響も踏まえ、審査員の選定には慎重を期さなければならない。

そもそもプロポーザル方式が、（一応）提案させながらも結果として実績主義に陥っている原因は、専門家不在のインハウスにある審査体制にある。提案の善し悪しにあまり触れることなく点数の公表もしてすれば事足りるから（事務所規模や実績は数値化しやすいから）である。

以上、大きな三つの問題点について、設計者選定を通してその解決を試みてきた。下記にてその具体的な行動を箇条書きに纏める。

■市町村に対しての行動
・自治体の首長に良好な公共環境を実現する手立てとしての設計者選定の企画提案を行い、その後の運営を担う。
→通常の公務にはこのような自治体に対する役割はなく、プライベートな立場で提案した後、公務外でアドバイザーもしくは委員として要項作成等運営にも参画（対価外、休暇等）。

■県の事業としての行動
・発注部署にいれば、当然業務として実施。
・発注部署に属していなくても、発注部署である事業課に企画提案しアドバイザー等で関わる。
→ところで、他部署の職員が関わる慣習がほぼ無いので、多くは属子として調査なしでサポート。

■市民に対しての行動
・計画段階から参画を促しワークショップ等を企画。
→施設計画のブラッシュアップのみならず、施設運営や他の まちづくりへの波及も念頭に置く。
・市民に関心を持ってもらうこと、設計者に福広い提案を知ってもらうことを念頭にプレゼンテーションや審査を一般公開する。

■設計者に対しての行動
・プレゼンテーションや審査、提案書を一般公開する。
・設計者選定に若手設計者にも参加機会を与える（できるだけ参加ハードルを下げる）。

■関連する事業に対しての行動
・発注者（事業者）、設計者、専門家、関係団体、市民が同じテーブルで議論できる場を設定する。
→建築と同時に計画されている周辺整備事業に積極的に関わることでトータルデザインができる。

5

私がこれまでの活動を通して確信してきたことは、設計者選定という行為自体を、市民や自治体職員や審査員を「巻き込む」プロセスとして一体的にデザインする（仕掛ける）ということだと思う。

それは、確立した方法論やルールの通りにやればうまくできるわけでは無い。これまでの失敗から学ばされた多くの反省を踏まえて、プロジェクト毎に最も相応しい（時間的制約も含め）進め方を模索しながら、まるで山登りのように一歩一歩を踏みしめつつ登っていく必要がある。

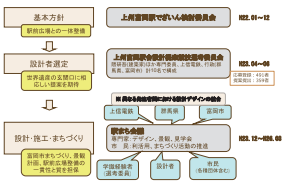
専門家を連れてくれば、すべてうまくいくだろうと幻想してはいけない。
よい設計者が選べたから良いものが出来るなど、短絡的に考えてはならない。

そこには建築や地域、市民に対する深い洞察しかなくてはならない。
そして未来の街や世代のための“公共建築”を作り上げるという責任感と情熱が何よりも必要である。

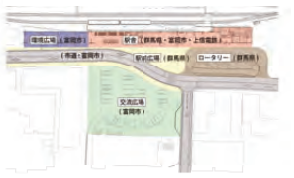
昨年 2016 年、群馬県高崎土木事務所次長を定年退職し、現在は群馬県富岡土木事務所の嘱託職員として、また NPO 法人 GS(ground scape) デザイン会議に籍を置き、内部チームとして自治体職員で組織する首都圏行政研究会を率いている。引き続き、様々な立場を模索しながら未来につなげる“公共建築”成立のために、泥臭く動き回り続けるつもりである。

■上州富岡駅舎　上空からの風景
標識・サイン・照明・緩石などといった利用者の眼に触れる景観の部分を様々な境界を乗り越えて一体的にデザインした。
結果として街に溶け込んだ市民に愛される駅舎としてデザインすることに成功した。

■上州富岡駅舎　街に建築が成立するまでのプロセス
・愛着のある施設をつくるために、市民参加を積極的に取り入れ、発注者（自治体・事業者）市民・設計者を巻き込んだワークショップ・意見交換を行いながら進めていった。



■上州富岡駅舎　周辺整備の見えない境界（整備施工区分）
・駅舎単体を設計するだけでなく周辺敷地も巻き込み、歩道、駐車場、広場という一体的な街の景観をデザインし、敷道と街、街と人間との境界をなくし、周辺風景を軟くすることに成功した。



■これまで進めてきたプロポーザル・コンペティションの一覧
―うまくいったもの、そうでないものもあるが、県内の小さいトイレから始まり、徐々に規模や参加する人たちが増え、全国へのその門戸を広げていくことが出来た。

2017/4/18

		開始年	主催	所在地(現在)	区分	事業規模	提出数	審査委員	テーマ	用途	規模・構造	竣工年度(定期していない方式)	審査委員長	審査委員(学識、専門家のみ記載)
1	妙高山公衆トイレ	1999	群馬県	富岡市	指名	県内	6	唐澤建築計画研究室	自然環境と建築	公衆トイレ	59㎡		中島内閣委員	
2	万座公衆トイレ	1999	群馬県（環境省）	嬬恋村	公募	県内	20	唐澤建築計画研究室	自然環境と建築	公衆トイレ	111㎡		中川武	
3	信州国地自然学習施設整備	2000	群馬県（環境省）	嬬恋村	指名	全国	8	平倉直子	国立公園内での自然学・センスーフの為の川	観光学習施設	109㎡	建築学会賞（業績）、中谷礼仁、土木学会デザイン賞	三村浩	林魁和世
4	吾妻町庁舎	2000	吾妻町	高崎市	指名	全国	3	山下設計	明治期以降現代による吾妻い場事業と業態化	庁舎	4981㎡		高橋仁一	小林正美 鬼崎真理
5	中里村庁舎	2000	中里村	神流町	公募	全国	246	吉谷設計	可能な限の産業化対策のコミュニティ支援をしていく庁舎	庁舎	1466㎡	日本建築学会優秀建築賞	中川武	内藤廣 渠澤正信 神芳紀津子
6	富弘美術館	2001	勢多東村	みどり市	公募	国際	1211	ネコジアイコ	建築富弘美が中心、2年の歳月を掛け建築	美術館	3442㎡	日本建築学会賞	伊東豊雄	山本理顕 間研修 中川武 鳳凰見子 ヴィーナ・ブレッツ
7	恵美町庁舎＋多目的施設	2002	恵美町	恵美町	公募	全国	242	山本理顕（SFTJのUA）	自然の豊富な恵りに入るエンドルフ中心の建築	庁舎、ホール	約13000		西広可	長谷川逸子 磯崎彰浩 中川武
8	高石町多目的ホール	2002	高石町	藤岡市	公募	全国	384	長島孔伸	現代建築における歴史関係図	体育館、ホール	2276㎡	M公園、グッドデザイン賞	浜本丁二	青木淳 後小木睦輝 中川武
9	安中環境アートフォーラム	2003	安中市	安中市	公募	国際	360	象本社会（SFTJのUA）	環境アーツフォーラムという開人場合で合者意参加	複合学習	指定なし		西広可	小林正美 南條史生 中川武 ヤコブ・ファン・ライス
10	千穂山の家	2003	群馬県	みなかみ町	公募	全国	13	チャック建築設計事務所	山岳環境と建築	避難小屋	111㎡		西広可	中谷礼仁
11	高崎市桜山小学校	2004	高崎市	高崎市	指名	全国	6	吉谷設計	公園化の地域と社会地域に対応できる建築	小学校	6456㎡	日本建築学会作品選奨	石田敏郎	田中麻理
12	さくらの里施設整備	2007	群馬県	下仁田町	公募	県内国産	21	エムロード環境造形研究所	自然環境と建築	公衆トイレ	97㎡		中島内閣委員	
13	ぐんま総合情報センター	2008	群馬県	東京都千代田区	公募	全国	181	アトリエック	群馬の魅力と情報発信デザイン	図書情報	2712㎡		西谷諒太	小内薫 佐野紀子
14	赤城森林公園施設整備	2008	群馬県	前橋市	公募	県内中心	18	ライフ環境建築設計	木の魅力と建築	ペンションー	146㎡		中島内閣委員	
15	道の駅よしおか温泉	2008	空間熱	西南熱	指名	全国	7	空間デザインシンイツ	西洋風国の文化を活で対話	物販	713㎡	JIA建築作品ウイン計画	陣内秀	中井祐
16	農業技術センター	2009	群馬県	伊勢崎市	公募	全国	151	セキハ・ウス	農業技術者、農業試験ホれた場合デザイン	研究所	2205㎡	グッドデザイン賞、本年度賞 ビンテージ建築賞、JIA 日本建築学会賞建築賞	西谷諒太	伊藤賀俊治 赤松佳珠子
17	中央児童相談所	2009	群馬県	前橋市	公募	県内	11	プロッドデザイン	共同における場合ハスとされ共と公園施設	児童福祉施設	1976㎡		石田敏郎	
18	敷島公園バスターミナル	2009	群馬県	前橋市	指名	全国	5	西村設計ーヴィジョンズ	周辺環境に配慮した小規模バスターミナル	バスターミナル	駅規約700㎡		佐々木茂	松井洋
19	保育活動センター活動観察広場棟	2010	群馬県	伊勢崎市	公募	全国	36	共同建築設計事務所	生活空間の中に、自然プログムを観察するアイデア	幼園	1997㎡		内山亜俊	辻自規
20	元町社用営住宅	2010	群馬県	前橋市	公募	県内	19	エムロード環境造形研究所（山本理顕）	コミュニティ・カフェ、コモンスペース、共有空間	集合住宅	4496㎡		渡辺英尋	夏野直 中田優太 田中麻里
21	共愛学園前橋国際大学4号館（共愛センター）	2010	学校法人共愛学園	前橋市	公募	全国	321	佐久美子	多様性ー大自然と大学のイーアップ	大学	1954㎡	グッドデザイン賞、日本建築学会作品選奨	西谷諒太	千葉学 平倉直子
22	前橋市美術館(アーツ前橋)	2010	前橋市	前橋市	公募	全国	130	吉谷設計	コンバーションにより、まちなか活性とつながる美術館	美術館	5512㎡	建築賞、グッドデザイン賞 Bund10、SDA Award優秀賞、JIA公募デザイン賞	西谷諒太	高橋昌子 吉田敏浩 真宮信夫
23	富岡駅周辺デザイン監修	2011	富岡市	富岡市	指名	全国	5	佐久美子	市民参加ーワークショップ	駅舎広場等	3,0ｈａ		内藤廣	山口信之 山崎亮
24	上州富岡駅舎	2011	群馬県	富岡市	公募	全国	205	武井誠+鵜島千恵 TNA	まちづくり及び世界遺産を目ロとした駅舎	駅舎	481㎡	グッドデザイン賞Bund10、日本建築学会賞、BCS賞	岡部憲明	青 孝徳 梅沢良三 熊杯浩 都丸美子
25	沼田市生方記念文庫	2011	沼田市	沼田市	公募	全国	154	東松照	原爆環境地代のおりくりとマイ	資料施設	270㎡		藤森照信	松井洋
26	富岡市新庁舎	2012	富岡市	富岡市	公募	全国	58	隈研吾	ワーク・シェアリングを考慮した21世紀の庁舎	庁舎	9000㎡		大野秀敏	望月敏 戸谷陽

③「未来につなげる社会貢献」―街に公共建築が根づくまでの長い道のり

水辺の豊かで創造的な未来を作る活動における水辺の建築家の活動

水辺に魅力を感じ、水辺の未来をもっと豊かで暮らしに近づけるために2004年より活動してきたことが、最近は官民連携の水辺のまちづくりを実現するためのかけがえのない経験となり、日本全国の水辺を魅力的にする活動を応援することになった。計画者がいかに計画したとしても、いっしょに運営にたずさわる者、つかいこなすひとびとともにつくりだすことの大切さを自身の建築作品にも生かされている。
建築家としての職能を生かし、多様な主体が見ることができない水辺の将来像を描くことができる。その将来像をともにつくりだし、それを地域の将来のビジョンへつなげる活動を行っている。
また、自ら組織を立ち上げ、経営にコミットし続けることで人に使われる水辺に風景を作り出した経験が、単に計画するだけではなく、運営にコミットするひとびとを掘り起こし、その場にかかわる人々とともに、それぞれの地域(和歌山、横浜、東京、久留米など)で水辺のまちづくりのお手伝いをしている。

Raas DESIGN
/ 株式会社水辺総研 岩本 唯史

2004-2012

水辺のアーバンゲリラ活動フェーズ

2012-

水辺の真の「風景」をつくるフェーズ

2014-

水辺の創造的な未来をつくるフェーズ

④ 水辺の豊かで創造的な未来を作る活動における水辺の建築家の活動

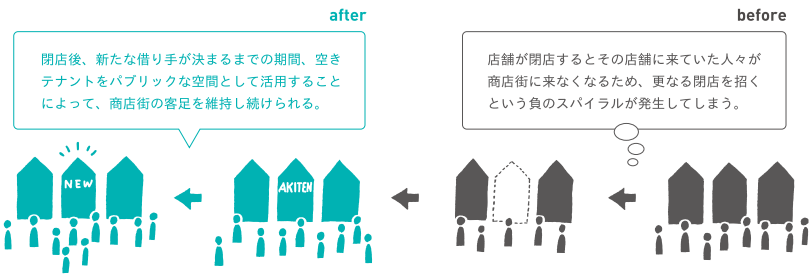
第3回 これからの建築士賞 入賞作品

akiten

空きテナントを活用して、商店街の衰退を食い止めつつ、地域の魅力発信と実験の場をつくる。

NPO法人AKITEN

空きテナントを活用して、商店街の衰退を食い止めつつ、地域の魅力発信と実験の場をつくる。



NPO法人AKITENは、空きテナントを活用した地域活性化事業を運営する団体です。空きテナントを活用することによって商店街の衰退を食い止めるとともに、テナントの新たな活用方法を提案していくことで地域の独自性を持ったエリア作りを進めています。空きテナントはその存在が商店街の衰退や地域自治脆弱化の原因となってしまうため、まちの負債として捉えられがちですが、閉ざされたままでは通行人に見向きもされない空きテナントも、入居者が決まるまでの間、開放して地域で活用することができたならば、まちの貴重な資産になります。空きテナントを使ったギャラリー、ファーマーズマーケット、遊び場、公園をはじめ、空きテナントの使い方を検討するワークショップを経た新規店舗のデザイン、設計など、AKITENの活動は多岐に渡ります。空きテナントをまちの資産と捉え、誰もが空きテナントを使えるシステムを構築し、行政やまちづくり会社との連携の中で空きテナントをまちづくりのツールとして活用していくとともに、空きテナントの使い方の実験を繰り返していった結果、八王子駅周辺の空きテナント率は大きく減少しました。

Case 5

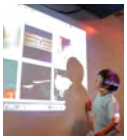
空きテナントの使い方検討ワークショップ

空きテナントや、空きテナントを抱える商店街路の活用方法について、地域住民、テナントオーナー、不動産業者、行政職員、学生とともに検討するワークショップを開催。
ワークショップで検討されたアイデアをもとに、建築士を交えて、他のCaseで紹介している空きテナントを活用した企画や、新規テナントの誘致、設計へと繋げていった。

Case 3

空きテナント × **遊び場づくり**

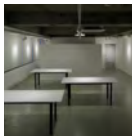
スケルトンではなく、居抜き状態のまま募集がかかっている空きテナントに残されていた什器、壁、照明、椅子、テーブルなどの残置物を使って、どのような遊び場を作ることができるか子供たちと一緒に検討したワークショップ。
ワークショップで検討されたアイデアを基に、子供たちと一緒に空きテナントをゴルフコース、フォトロゲイニング場、ディスコなどへと作り替え、まちの中に新たな遊び場所を作った。



Case 1

空きテナント × **アートギャラリー**

空きテナントを使ったアートギャラリー。
汚れた空きテナントをアーティストの力で彩ることで、商店街に新たな集客をもたらすとともに、空きテナント活用の有効性という気付きを周辺ビルオーナーに訴求できた。
アートに対する地域ニーズを確認できたことから、常設の空きテナントをAKITENで設計・施工し、地域アーティストの展示の場として運営している。（写真右）



Case 6

空きテナント » **障害者就労支援施設**

アートギャラリーとして活用した空きテナントに、障害者就労継続支援事業で運営するギャラリーカフェを設計・施工。
フード・ドリンクメニューの企画や食器選定、ロゴデザインなどもAKITENメンバーで請け負った。
空きテナントギャラリーとして使用した際に子供たちが多く集まったことから、キッズスペースを広く取り、障害者と子供、母親がコミュニケーションを取れる空間を作った。

Case 4

空きテナント × **空き地**

八王子駅周辺に公共の広場がないという地域課題に対して、雨の日でも遊べる空き地を空きテナントの中に設計、施工。
空き地を彷彿とさせる土管を使ったステージや、お祭りの縁日、落書きができるブロック塀、廃バスを模した移動図書館やサーカステントなど、1日当たり500人が来場する公共空間を作るとともに、この地域に広場を作ることの有効性を検証することができた。

Case 2

空きテナント × **ファーマーズマーケット**

空きテナント複数店舗を使って多摩地域の食生活の魅力を発信していくファーマーズマーケットの設計・施工・運営を手掛けた。
常時、1日平均500人の来場者を集め、地域における農産物、加工食品、クラフト品などの販売場所の必要性を確認するとともに、屋外で開催されるマーケットよりも飲食物出店上の保健所許認可を得やすく、雨天の影響も少ないという利点も検証することができた。

⑤ 空きテナントを活用して、商店街の衰退を食い止めつつ、地域の魅力発信と実験の場をつくる。

パンは建築。神田川ベーカリー

軍司 有佳里　中島 千尋　三浦 雅美　小沢 彩　倉益 孝行　小牟田 恵　三浦 美樹　伊藤 大貴
嶋田 玲子　福本 怜　嶋田 洋平　三浦 丈典　茨田 禎之　小田 大輔　多田 治樹　西村 浩

⑥ パンは建築。神田川ベーカリー

第3回 これからの建築士賞 入賞作品

「住居と園庭」

松浦荘太建築設計事務所

■概要～小さな社会性を帯びた住宅～

兵庫県尼崎市の住宅地に建つ住居と園庭です。住宅という空間のあり方や家族構成が多様化する昨今で、住み慣れた土地に女性単身が住むという条件下、その住まいの新しい可能性について考えました。施主と話し合いを重ねて、敷地の１部を隣地の保育園の園庭として使う計画としています。1階が外部に開放されたピロティを設け、園児たちが遊ぶ住居の下の園庭となっています。保育園裏庭との間にある擁壁を一部取り除き、園児は道路を介さずに行き来します。住宅という建築は小さくプライベートなものですが、土地の敷地境界線を越えて、この地域に関わる人達が互いに気配を感じる社会性を帯びた場所となっています。

台所から園庭を眺り返すと園児たちが遊ぶ姿、園庭と寝室が同じ開口高さでみえる

高窓を解放し、煙突効果で建物全体に風が抜ける

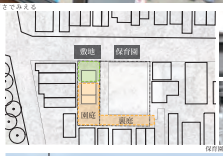
園庭のピロティの下、壁柱の間を園児たちが通り抜けて遊ぶ

■背景～施主一人のための住宅から～

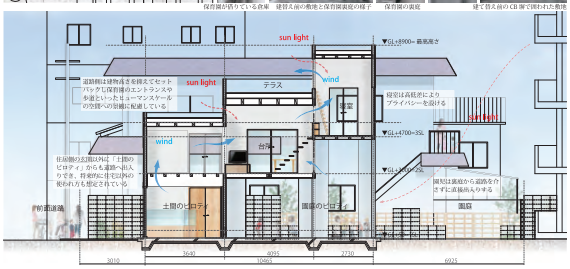
施主は設計者である私の母親であり、敷地は母が生まれ育った土地でもあります。女性が一人で生活するための家の設計というのは、昨今それほど珍しいことではありませんが、一軒家の住宅を建て替えにあたり、その費用や労力、独居することによるセキュリティなど、一般的な家族住まいとは違う住まいのスケールで考える必要があると感じていました。当初は住居と駐車場、またはシェアハウスや共同住宅としての建て替えも視野に入れて検討しましたが、近隣の住人とも縁のある場所であるならば、近隣に貸し出し地縁を育む場所にできないかと考えました。

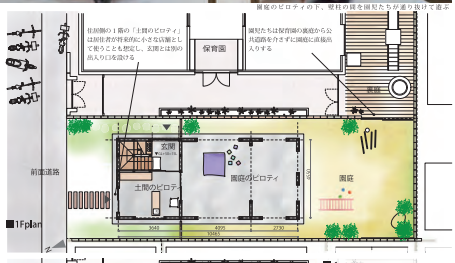
■都心の保育園の園庭

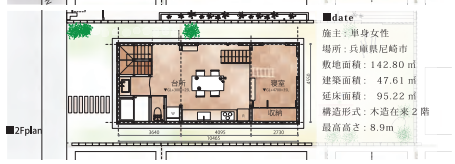
隣地の保育園は住宅が密集した場所にあるため、園庭が非常に狭く、園児や保育士の方々が近所の公園へ遊びに出かける光景を見たのが始まりです。保育所に話を聞いてみると、年長クラスの子供であれば大きな公園で遊ぶようになりますが、年少の子供はできるだけ教室から離れず保育士の目の届きやすい場所で遊ばせてあげたいとのこと。そこで施主である母親が元々小学校教員や介護の仕事をしていたりと、子供に関わることを楽しむ人柄であるため、保育園を交えて話し合いを重ね「住居の下の園庭」とすることになりました。



保育園が活りている敷地　建替え前の敷地と保育園裏庭の様子　保育園の裏庭　建て替え前のCB塀で囲われた敷地







■date

施主：単身女性
場所：兵庫県尼崎市
敷地面積：142.80 ㎡
建築面積：　47.61 ㎡
延床面積：　95.22 ㎡
構造形式：木造在来２階
最高高さ：8.9m

■複数の境界線を描く

敷地境界線による土地所有やプライバシーとセキュリティ、構造壁と床、音や断熱、光など、一つの住宅には様々な種類の境界線があります。そのたくさんの境界線を一つに集約して建築を造ることはとても効率的で単純で整理された計画のように思えるのですが、「住居と園庭」では敷地の外から建築の内部まで、敢えてたくさんの境界線を描くことで、建築と住人の生活が一致しすぎてしまわず、余白ができるようにしたいと考えました。

■地縁のある風景

都心で住宅を設計する際、土地の内で良好な環境を得ることに終始するあまり、敷地周囲との境界を強調するような閉鎖的な空間を求められることがあります。ここでは、住人や周辺環境の条件から、周囲を許容する価値観を基に取り組むことで住人も周辺環境も互いに獲得するものがあると考えました。竣工後、園児や送迎に来た保護者との会話や、街中で子供からの声掛けもよくあるようで、地縁のある風景の一つができたのではないかと感じています。

■ピロティがつくる園庭

敷地は間口が 7m 奥行が約 20m の細長い土地であり、隣地は３階建ての住宅や共同住宅に囲まれているため、住環境と園庭の両方に、明るく風通しの良い空間を生み出せる建築が必要だと考えました。この建築は木造の壁柱による３つの高さのピロティで構成され、前面道路側から奥の園庭に向かうに従い徐々に高くなり、また壁柱の壁量が少なくなることで、より開放的になってゆきます。高さ関係が住居内に床高さの変化をつくり、リビングからの振り返ると室内と同じように、子供たちの園庭が伺える視点を設けています。また高さのズレが住空間と園庭の両方へ光と風の通りをつくるように意図しています。

■高低差が光と風の抜けを生む断面

近隣建物に囲まれた周辺環境の中で、段々状の空間構成により、住居部には北の高窓から、園庭のピロティには南から日光が入ります。室内に高低差があることで、煙突効果を生み、建物全体が風通しのよい居室環境になります。また構造としては高さの異なる３つのピロティを並べて、高さが低く壁量の多いピロティに対して、より高く壁量の少ない開放的なピロティがドミノのように寄りかかり、建物全体で成り立つ構成となっています。

■住居として、園庭のとしての開放性

住居というプライバシーの高い空間を開放的にする際は、ある限定された開放性が大切だと考えます。また園庭という空間もセキュリティの面から限定が必要とされます。「住居と園庭」では道路側へ向けて開放するのではなく、細長い敷地の奥に園庭を設けることで、不特定多数に対してではなく、この土地に接する人々という限定をつくり、プライバシーやセキュリティを確保しながら開放的な空間としています。

前面道路から。朝夕は園児の送り迎えで賑わう

住居側の玄関

園庭と保育園側の裏庭は現存のブロック擁壁を部分的に解体し、保育園側から園庭を見通せる

ペットスペースから台所、階段側を見下ろす

昼間は賑やかな園庭が夕方からは住居のための静かな庭となる

⑦ 住居と園庭

第3回 これからの建築士賞 入賞作品

実験研究室のリノベーション

クロスフィールド的視点で新しいラボ空間を創造する

建築築事務所　望月公紀＋市川竜吾

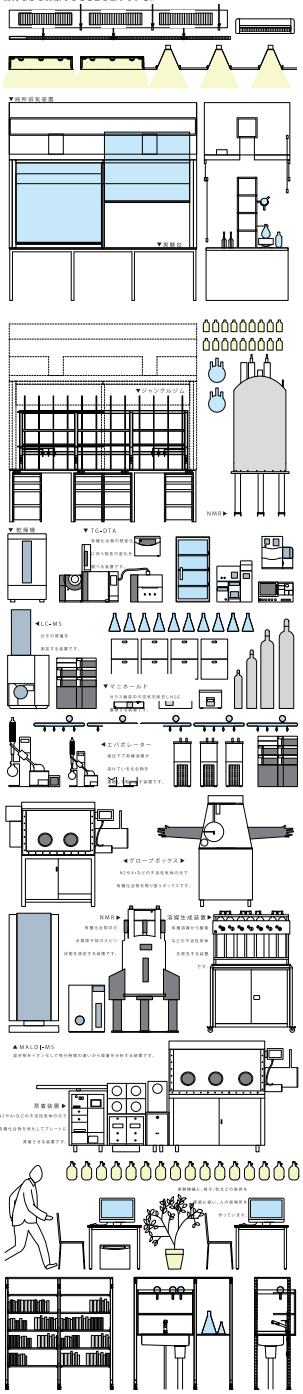
実験研究室が抱える大きな問題は２つある。１つは、既存建物の構造にある。設備の重荷に耐えるために強固なコンクリートの「土間」であることが多く、オフィスのように、床下に配線配管できるシステム床ではない。そのため天井から無作為に垂れ下がる配線や配管が、場当たり的に置かれた複雑な機器を取り巻いて空間を圧迫し、決して快適な環境とは言えないのが現状である。

もう一つの問題が、研究者と実験目的を共有し、その達成のために最適な空間を提案できる建築家がいないことだ。その理由として、特に各領域が高度に専門化された最先端研究の領域では、建築家が実際の研究内容を理解した上で研究者と対等にコミュニケーションすることの困難さがある。それゆえ、従の要望を秩序ある空間として まとめあげる仕組みを提案できず、結局は設計者が研究者の信用を得られないまま、建築の専門ではない研究者自らが研究環境をつくっていることが大半なのだ。

ここで紹介する一連のプロジェクトでは、設計者がかつて化学研究に携わっていた経験を活かし、研究施設の使用意図や専門的な実験内容を理解した上で、一歩踏み込んだ密な情報交換を研究者と行うところから設計を始める。そして構造および設備が凝縮された天井伏と設置される実験機器とを、研究内容を考慮しながらシンプルな建築的手法でつなぐ方法を模索している。

研究室という特殊な分野にクロスフィールド的視点を持つ建築家が入ることで研究環境の安全性が担保されるだけでなく、効率良く快適な空間を実現する空間のスタディがこれらのプロジェクトで始まったのである。

こういった研究空間を一つでも多く実現することで、研究者の社会に広く研究室を設計するという文化が広まり、新たな日本発のイノベーションが生まれることに微力ながら貢献できることを願っている。



東京大学実験研究室
ラボラトリーEn

１つの研究室がいくつもの小部屋の集積により構成されているため、局所排気装置をすべて壁面に沿わせ、給気、排気、空調を適切に配管することにより、天井に配管ダクトが一切出ないようにした。空いた天井を照明器具で埋め尽くすことで、暗くなりがちな作業環境を光で満たし、実験中の作業面に影が出ないような空間を実現している。

実験機器を納める棚は、耐震性を確保しつつ、それぞれの研究者のニーズに合わせながら個別に設計。オレンジを基調に、研究者に認識されやすいよう配線ラックをダークグレー、照明をライトグレーのフレームとして、研究者がDIYで棚を可変しても壊られる工夫をした。さらに各機器の棚には背面にメンテナンスできる通路を設け、実験室にできるだけ死角ができないような配慮もしている。

小部屋で分割された構成であったが、ガラスの開仕切りを多用し、空調環境はそれぞれの部屋で制御しつつも、研究者同士が空間的に一体感を感じられるよう、繋がりのある研究環境を実現した。

京都大学実験研究室
ラボラトリーMn

有機溶媒用の局所排気装置「ドラフトチャンバー」を何台も置く必要のある実験室では、配管が天井を這い、空間を無秩序にしてしまう。この研究室には、中庭に面した設備バルコニーがあったため、排気装置を窓際に平行に設置。通常は窓を塞いでしまうために敬遠されがちだが、ほぼ全面ガラス張りのものを採用することで、採光を確保しつつ、排気設備に付随する配管経路を可能な限り短くした。なおかつ、装置を平行にしたことで、デスクワークルームと実験室とが相互に見通せる軸線を確保するという目的も達成している。

給気ダクトは梁を横断する形で長手中央に配置。天井面に吹き上げることで局所排気装置におだやかに排気を促している。

照明はタスク照明とし、作業環境のみを効率良く照らした。反射光も無駄にしないよう、天井設備をシルバー素材で覆い、通路面にも光が行き渡るように配慮した。照明から配管、配線ボックスを個別に作業面に下ろす工夫もしている。

膨大な量のガラス器具の管理方法として、器具が転がらないような棚を新たに設計し、器具の位置を見える化し効率良く管理できるようにした。

東北大学実験研究室
ラボラトリーHi

異なる2つ研究領域が１つの空間で共同作業する実験研究室の設計である。デスクワークルームと実験室が分かれていたため、互いに情報交換しやすい環境にすることが命題であった。

実験室では、有機溶媒を使用するウェットな環境の実験室と、デバイス作成を主とするドライな環境の実験室という異なる性質の空間をワンルームとして感じる空間にするため、ガラスのパーティションで区切り、視線が抜ける機器や棚の配置計画を丁寧に行った。共用廊下から実験室に入るときに、全ての機器の稼働状況と、人々のアクティビティが一度に見渡せるような配置にもしている。また、室内を縦横無尽に駆け巡る既存の配線ラックを撤廃にすることで、一体感を感じる工夫もした。乱雑になりがちな配線は全て棚柱を通して机や棚に配線をし、機能を満たしながらも整理できる配慮をしている。

▼デスクワークルーム

東京大学実験研究室
ラボラトリーHI2

有機溶媒を利用する場所に必要な局所排気装置とそれ以外の実験台、分析機器を研究者がストレスなくシームレスに繋ぐことが実験研究室にとっては理想であるというコンセプトのもとで、局所排気装置のデザインと実験台、棚のデザインを全て手がけた実験研究室である。

局所排気装置はこれまで間柱の多数社の実験機器メーカーからしか制作されておらず、研究者のニーズに合わせてディテールまで考えた排気装置は皆無であった。制作には開口部面風速など労働基準監督署への届け出を含めた様々な手続きが必要であったが、そういった手続きも含め、視認性90%以上のあたかもそこに排気装置が無いような環境を作り上げている。

照明は排気装置、実験台、棚をすべて光幕天井システムとし、一体的な光環境を実現している。この研究室も小部屋の連続した環境であったが、構造を検証し、梁力壁を抜き一体的にそれぞれの部屋の活動が見えるような環境作りを心がけている。

⑧ 実験研究室のリノベーション